

## はじめに

化学物質という言葉自体、化学を学んだものにとっては奇妙な言葉ではあるが、辞書によれば、人工的に合成された比較的純度の高い物質を意味する言葉のようである。すなわち、人工物として代表的なものであると理解すべきだろう。

人工物は、天然物と違って、その特性によっては地球上に存在している様々なシステム、例えば、人体、動植物、生態系などに悪い影響を与える可能性がある。勿論、天然物でも同様ではあるのだが、現在存在している種は、天然物との付き合い方はある程度心得ているものだけが残存していると考えられることもできる。

人工物が作られる理由は、そこになんらかのベネフィットが存在するからである。すなわち経済的な効果をもたらすことが可能なものが製造される。以前、経済的な効果だけを考慮した人間活動によって、公害というものがもたらされた。人工物は、そのベネフィットだけを考慮するのでは不十分であり、その物質によって引き起こされるリスクを勘案した総合的な管理が行われなければならない。すなわち、化学物質の管理の原理原則は、と問われれば、基本的に天秤のバランスをどのあたりで取るかという問題であり、どこを中立点だと考えるか、それは、その社会の構造、個人の信条、価値観の変更などによって大幅に変化する可能性が高い。

化学物質の管理とは、そのため、その物質の毒性に関わる情報だけを取り上げるのでは充分ではなく、対策技術や処理技術が必要であると同時に、環境中での挙動に関する情報から、最終的には、社会的な受容性を得ることができかどうか、すなわち、コミュニケーションに関わる事柄まで考慮に入れて行われなければならない。

自然科学・人文科学・社会科学をすべて理解するのは無理だと思われるが、実は、化学物質の管理という命題だけを考えても、そこにすべての科学が絡む領域であることが分かる。

このような複雑な領域をどのように取り扱うべきなのか。本報告書は、そんな問題意識をもった一つの集団、すなわち、化学物質リスク総合管理技術研究イニシアティブの活動の一環として開催した合同プログラム会合の記録である。まだ様々な試みが必要な段階であると認識しているが、一つの試みとしてご覧いただければ幸いである。

化学物質リスク総合管理技術研究イニシアティブ座長  
安井 至（国際連合大学 副学長）

